



# 妙たえの光ひかり

復刊124号

## 穏やかな家族の日々に

新潟市西蒲区

笹川正明さん(67歳)とご家族

笹川正明さんは、仕事の依頼があつて出かける日以外、お仏壇へのお参りを欠かさない。コロナ禍で仕事が減つたため、お参りはほぼ毎日と言つていい。夕方5時ころから30分、正座して鉦かねを叩き木鉦もくしやうでリズムをとりながら檀信徒用のお経本を読み通す。

「大きな声を出すのは健康に良いと聞きますが、本当にそうだと思います。日によって声の調子が変わることで体調の変化もわかります。正座にも慣れました」と穏やかな笑顔で語る。このお勤めを終えると風呂を洗い、そして共に91歳になる両親が休むための布団を整える。「私の日課ですね」と。

お経を読むことに関心を持ったのは、熱心な信心家だった祖母アキさんの死がきっかけだった。平成2年のことで、正明さんは当時34歳だった。東京で働いていたので、それまでは帰省した時に仏壇に手を合わせる程度だった。それが母親の悦子さんに勧められて、お経を録音したテープを聞いて関心がでてきた。

(2ページに続く)



## 行事案内



### お盆墓参り(お墓経)

下記日程の時間内、墓地にお上人さんが待機しています。墓経を希望される方はお声がけください。

- 8月1日(火)  
墓経受付/午前6時~11時
- 8月11日(金)(山の日祝)  
墓経受付/午前8時~12時



### 施餓鬼法要(本堂)

- 8月1日(火)  
11時30分~12時10分  
卒塔婆に故人の法号を書いて、読み上げ供養いたします。ご希望の方は事前にお申込み下さい。

### 新盆法要

- 8月6日(日)  
檀徒で今年新盆にあたる精霊のお位牌を安置し、ご供養します。  
該当するご家庭には直接お知らせを入れましたので、ご確認の上どうぞご参列ください。  
※檀徒以外の新盆供養もお受けします。ご希望の方はお問合せ下さい。

### 墓地合同法要

- 8月13日(日) 午後3時~4時 安穏廟あずま屋  
妙光寺墓地に眠るすべての精霊をご供養するお経をあげます。どなたでもご参列ください。  
※この日は個別の墓経は受けかねますので、ご了承ください。



### お盆棚経

- 8月2日(水)~12日(土)  
ご自宅への仏壇参りです。お申込みのお宅へは例年通り伺います。

### あとがき

今号のインタビューは、62歳にして修行し正式に僧侶となった櫻井上人です。60代で新しい世界に踏み出した、まさに中・高年の星、といえるのではないのでしょうか。是非お読みください。夏を迎え、お寺は「お盆、そして『送り盆』」の準備が進んでいます。どうぞお参りにおいでください。(新倉理恵子)

### 岩屋七面様祭礼

8月19日(土)

午前10時、本堂にて法要とお加持。岩屋に移動して法要。  
お昼にお赤飯のご供養があります。ご自由にお参りください。



### 万灯のあかり—妙光寺の送り盆

8月26日(土)

詳細は別紙チラシをご覧ください。  
◆献灯のご案内  
1基2千円 メッセージを添えてお申し込みください。



### 秋季彼岸会法要

9月23日(土・祝)

- 午前 10時30分 安穏廟法要
- 11時 本堂にて彼岸会中日法要
- 12時 おとき
- 午後 1時 住職法話  
予約不要です。どなたでもお参り下さい。

### 月例ボランティア

毎月15日ですが、7月、8月は日にちが変わります。

7月30日(日)、8月24日(水)、9月15日(金)

- 午前9時~12時 午後1時~3時  
7、8月はお盆と送り盆の準備、9月は清掃作業等です。たくさんの皆様のご協力をよろしくお願い致します。

### 月例信行会

今年度から曜日と時間帯が変わっています。

7月5日(水)、9月6日(水)、10月4日(水)

- 毎月第1水曜日 午前9時~11時  
※8月はお休みします。  
お参り、法話、作務、コーヒータイム等があり、交流の輪も広がります。  
■参加費 お志を各自賽銭箱にお願いします  
予約申込み不用。当日直接お寺へお越し下さい。

### お会式と第20回法号授与式

10月22日(日)

※詳細は妙の光・秋号でお知らせいたします。

新潟市西蒲区 笹川正明さんとご家族

まぶたに残る祖母の信心

祖母のアキさんは、近所のやはり妙光寺檀徒の家から嫁いできた。農家だったが夫の竹次郎さんは銀行勤めで、6反の田んぼと畑仕事は手伝いの人を頼んでアキさんが担った。一男三女が生まれ、長男正明さんは早稲田大学法学部を卒業、弁護士を目指して東京で苦学する親族期待の星だった。ところが昭和29年、栄養失調から肺を患い29歳の若さで亡くなった。その3年前には56歳の竹次郎さんが、脑梗塞で急死した。

アキさんは元々実直な性格の上に、実家の両親の影響もあって信心深い人だった。それが相次いだ家族の死を機にさらに熱心に信仰するようになった。朝晩太鼓を打つての仏壇参りは無論、大好きなお寺の行事は欠かさず、体力の続くまで本山等への団体参拝にも参加した。「よく『ご前様（現院首）と誕生日が一緒なんだ』と、嬉しそうに口癖のように話していました。そう語るのはアキさんの末娘で正明さんの母悦子さんだ。

悦子さんは思いがけず兄が亡くなり、姉2人が嫁いでいたので家を継ぐ覚悟を決め、啓作さんをお婿さんに迎えた。啓作さんの実家も近所の妙光寺檀徒で、しかも2人は同級生だった。今から70年ほど前の話である。アキさんは米寿のお祝いをした翌年、89歳で亡くなった。長男と夫を亡くした辛さの中で熱心にお参りする祖母アキさんの姿は、正明さんのまぶたに残っている。アキさんの希望で正明さんの死から2年後に生まれた正明さんの名前に、正明さんの正の字が使われた。その正明さんが亡くなる前、度々妙光寺に泊まってお経を読んでいたと聞かされたことがある。病を治したい一心だったのか、詳しい事情は今となっては知る由もないが、何か不思議な縁を感じるという。

ひとり娘の小学校入学を機に

正明さんは新潟大学を出て一時地元企業に勤務、その後上京して建築設計のコンピュータソフトを売る会社に入った。30歳なって結婚した相手が、郷里の小中学校で1年下の則子さんである。

そして生まれたひとり娘あやかさんを伴い盆暮れに帰省する度、両親は必ず「おかえり、ここがあやかの家だよ。」と迎えて孫を可愛がった。すっかりなついたあやかさんは「お爺ちゃんお婆ちゃんの家に行つて、田舎の小学校に入りたい」と言つた。これを機に一家は新潟に戻ることにした。

以来5人家族の同居が始まり、家も建て替えた。正明さんはコンピュータ関係の仕事に就き、今はNTTの下請けで出張してパソコンの設定や、システムの修復等に携わっている。



5月27日「開山会」岩屋の法要で、西山講中の皆さんと共に。中央奥が笹川さん

穏やかな家族の中で

5〜6年前から正明さんは、高齢の父啓作さんに代わり、妙光寺檀徒の集まりである「西山講中」に参加している。講中というのは地域ごとに古くから続く檀徒の集まりで、「西山講中」は春秋の年2回お経を読み懇親会を開いている。年2回の練習ではお経は覚えられない。正明さんは、妙光寺で制作したお経のCDをコンピュータに取り込んで練習を重ねた。いまでは録音に頼らなくても一人でリズムをとって読めるようになった。この5月、妙光寺開山会の岩屋の法要でも、「西山講中」の人たちと一緒にお経を読み団扇太鼓を叩いた。

「元氣だった両親はともに90歳を越えて歳とともに弱っています。また自分自身も年齢を考えて仕事を減らし、今では両親の病院の送迎が仕事みたいなものです。幼かった娘の世話から家のこと、すべてを担ってくれた両親には本当に感謝しています」と正明さん夫妻は語る。家族の中に穏やかな空気が満ちていた。

(院首記)

安 穩

小川良恵

自然の中に  
仏様の声を聞き、姿を見る

令和5年も半分を過ぎて、日によっては汗ばむようにもなりました。あれだけ寒かった本堂もストーブが必要なくなり、季節の移り変わりの速さに驚いています。

駐車場に多くの車が

さて、気温があがるにつれ、境内の鳥の声も賑やかさを増しています。今年も人は人の出も多くなりました。法事で来寺された方に「今日は車がずいぶん沢山止まっていますか、何か行事ですか？」と問いかけられたほどです。あらあら皆さん、この陽光なのでお参りかしらと様子を見に行つてみれば、墓地は静かなもの。けれど駐車場は、半分ほど埋まっています。どうしたことかとふと見回すと、目に留まったのは色とりどりの服を着て、杖を突いて颯爽と歩くグループ。角田山登山にいられた方々でした。止められた車の中には、県外ナンバーもちらほら。関西のナンバーもありました。後で聞けば、昨年NHKの「日本百低山」で取り上げられたこともあり、登山客が増えているそうです。安穩廟を求めてこ

られる方の中には、「角田山が好きで」という方も大勢いらつしゃいます。

溪声山色

昨年亡くなった母方の祖父も山が好きでした。正確に言えば、自らを「放浪の釣り師」と名乗るなど、溪流釣りに人生を捧げていました。戒名を考えると、「川」の文字を入れるか「流」の文字を入れるかと辞書をめくって悩んでいたところ、ふと目に留まったのが「溪声山色」という言葉です。漢詩の一句「溪声便是広長舌 山色豈非清浄身」が展で、「川の流れる音の中に仏様の声を聞き、美しい山の景色の中に仏様の姿を見る」という意味だそうです。これだ！と思いました。

日蓮聖人の言葉

実は日蓮聖人も「然れば吹風もゆるぐ木草も、流るる水の音までも、此山には妙法の五字を唱へずと云ことなし」という文章を遺されています。此山とは晩年を過ごされた身延山のことです。「山の自然全てが南無妙法蓮華経のお題目を唱えているよう

に聞こえる」というのです。さらに日蓮聖人は「日蓮が弟子檀那等は此山を本として参るべし」と続けられ、身延山は、私たちにとつての靈鷲山（お釈迦様が教えを説かれたインドの山）であることを示されました。日蓮聖人が法華経を深く学んだ身延山は、皆さんが修行をするにもとても良い場所であるというのでしょう。

妙光寺本堂で  
自然に耳を澄ます

5月27日、妙光寺では、第1回開山会を行いました。「開山」というのは、お寺が創始されるという意味で、仏道修行が静かな山奥で行われていたことに由来します。お寺はもともと墓地を管理する場ではなく、仏教を学ぶ場でした。皆様も、お参りだけではなく、もつと気軽にお寺に来ていただければと考えています。もちろん修行といつても、滝に打たれかけが修行ではありません。まずは本堂で仏様に静かに手を合わせ、潮騒や川のせせらぎ、葉擦れの音に耳を澄ますことです。季節ごとに景色を変える自然の姿に、仏様の声や姿が見えてくると思います。

◆『岩屋・七面天女物語』

午後からは岩屋を会場に、遠壽院大荒行堂・戸田伝師・鼓童、小島千絵子さん他出座の『岩屋・七面天女物語』が圧巻でした。



洞窟内は音響、照明がよく映えました



日蓮聖人役の戸田伝師が七面大蛇を改心させます



七面大蛇に扮した小島千絵子さん



2回とも150席が満席でした

寺のうごき



かいさんえ  
◆開山会 5月27日

快晴のもと500人余りの方々と賑わった一日でした。  
(ホームページからYouTube「<https://youtu.be/uDMpZY5g0Vk>」に入ると、10分間の動画がご覧いただけます)

院庭の蓮の花飾り作り体験コーナーで



門前の参道バザールの賑わい



客殿にも院庭にも多くの人が



各種専門家による心配事相談コーナーも多くの方が訪れました



出番を待つ不安げなお稚児さん



法要前、修行僧2人による水行



山門法要を終えて雅楽を先導に本堂に向かうお練りの行列



大法要に出仕のお稚児さん



巖かに大法要



お抹茶席では中学生のお手前も



昼食は当番手作りの「妙光寺芳飯」が好評でした

# 身延山「信行道場」 35日の修行を終えて

二〇二一年四月の「ご判様」の際に妙光寺本堂で「得度式」を行い、良恵任職の弟子となった櫻井義秀さんは、コロナ禍の中で修行を続けてきました。そして今春、身延山久遠寺「信行道場」での35日の修行を終え、正式に僧侶の資格を得ました。

「信行道場」終了から10日後の櫻井上人に、お話を聞きました。



櫻井義秀上人  
1961年山形県上山市生まれ。62歳。北海道大学大学院教授（宗教社会学）。統一教会問題ではたびたびマスコミに登場している。

**Q** そもそもは院首様のお友達と聞いていますが、いつごろからの付き合いですか？

**櫻井** それが初めてお会いしたのはいつなのか、よく覚えていませんよ。修験道の勉強会で20年くらい前に知り合ったのではないかと思います。私も仕事柄、百人以上の僧侶の方に話を聞いてきましたが、院首様のようにフランクに現代の寺について語る方は珍しいので、親しくさせていただくようになりました。

**Q** 大学の先生として妙光寺とお付き合いされてきて、なぜお坊さんになることになったのですか？

**櫻井** 実は数年前に父が、2年間寝たきり

の後亡くなりました。私の父は三男で、実家のお寺は山形市にあつて少し遠いんです。一人になった母がいつでも募参りができるようにと、結局上山市内の日蓮宗妙正寺の永代供養墓に骨をおさめました。葬儀・納骨の折、院首様に相談のついでにいただき、仏教をさらに学びたいと手紙を書いたところ、二〇二一年一月に妙光寺でじっくり話を聞きましようと思いをもらいました。

**Q** 院首さまに相談事をして、お坊さんになる方はあまりいないと思いますが、そこをもう少し聞かせてください。

**櫻井** 僧侶というのは日本では稼業のように考えられていますが、私は仏教のことを真

剣に学んで実践する「生き方」が僧侶だと考えているんです。茶道や華道も、本だけを読んでお茶をたてないとか花を活けないとかいうのでは、学んだとは誰も言いませんよね。仏教もやってみないとダメだと思います。「行学」<sup>ぎょうがく</sup>「道」といいますが、実践をしないと学んだことにはなりません。父の死を経験して、私は人の生老病死に対する心がまえを深く識りたいと思いました。私のような経歴の人間を受け入れて、僧侶に育て上げるといふのは大変なことで、本当に感謝しています。

**櫻井** まず千葉県の清澄寺で「得度式」を受けました。これで「沙弥」というお坊さんの見習いになります。「沙弥」は柵経はできませんが、法要も葬儀の導師も勤めることができます。昨年は「僧道林」という一週間の修行をしました。その後教養の講習と筆記試験を身延山大学で受け、それから富山で読経の試験を受けました。ここまで来てようやく「信行道場」へ入場する条件が整いました。そして今年の4月15日から5月19日までの35日間身延山の「信行道場」で修行をして、正式に僧侶になることができました。



**櫻井** 「修行は支えられているからできる」という感謝の念です。私は33日目の晩に、頭が冴えて寝付けなかつたんです。その時、私がここまでやりぬい

**Q** 正式に僧侶になった後の10日間で、変わったことはありますか？

**櫻井** 朝の読経は以前からしていましたが、仏様と日蓮聖人への挨拶をして一日が始まっていくことをおろそかにしたくないという気持ち、堅固なものになっていきます。それから僧侶は掃除をしなければいけないと作務の中で叩きこまれましたので、帰宅してから「家のトイレ掃除は一生やる」と妻に宣言しました。「三日坊主なんじゃないか」と言われましたが、死ぬまで僧侶なので続けるつもりです。トイレ掃除は汚い、という意識はなくなりました。そこは35日間が変わりましたね。

**Q** この間統一教会問題でも発言してこられたと思いますが、あらためて考えていることはありますか？

**櫻井** 日蓮宗の修行の中で私が学んだことを通じて、統一教会はおかしいとはつきり言えると考えています。まず「靈感商法は悪い」と言っても、信教の自由があるので「信じていること自体がおかしい」とは言えないんじゃないか、と思ってしまう。しかし教えを実践することでどういう人間ができていくのかを観察すれば、教えの中身もわかります。統一教会の信者になった人は自分の財産を使い果たすほど献金して、人のお金も奪って、自分も他人も不幸にしています。これが地上天国だという宗教は、宗教としておかしいのではないかとつきり言っているんじゃないでしょうか。次に、宗教の教えには事実や真理とは別次元の物語が含まれており、法華経もお釈迦様の教えをもとにし

た壮大な物語だと私は考えています。そして、そこから何を汲み取るか何を実践するかは、伝統宗教の場合も——もちろん日蓮宗も、個人に任されています。だから「道場」での修行に自由はないけれど、35日間の経験をどう生かすかは個人に任されていて、そこに自由があります。しかし統一教会では教典はすべて真実とされていて自由な解釈は一切許されず、信者は従うことだけが求められ途中でやめれば地獄行きです。信仰を持つことで自由を失うというのは、不幸ですよ。

**Q** これから僧侶として、どんなことをしていきたいですか？

**櫻井** 私は若い僧侶と同じように働くことはできないでしょう。でも僧侶は奉仕の浄行を請願しています。宗教とは本来どうあるべきかということを死ぬまで探求しながら世の中を少しでもよくしていくことに関わりたいと思います。北海道では宗派を越えた若い僧侶の方々のネットワーク「てらつな」に加わっておりますし、日蓮宗の現代宗教研究所では特別研究員をさせていただいております。これからは日本の現代仏教のために、できることをやらせていただきたい。還暦後に一念発起して良かったと思うのは、まったく新しい人間関係と世界にめぐりあえたことです。みなさんも僧侶をめざしませんか。お手伝いいたします。

お上人になられたばかりの貴重なお話がありがとつございました。

（聞いた人・編集部 新倉理恵子）

**Q** 「信行道場」の修行を終えて、一番感じたことは何ですか？

**櫻井** 同期生は41人いましたが、3分の2は20代です。だから若者と同じ修行は肉体的になかなか大変です。ただ、私にとっては精神的な面でのカルチャーショックが大きかったですね。自由がないんです。具体的には、自分で自分の時間をコントロールできません。時計は最初に預けてしまつて、35日間は係の半鐘に合わせて行動します。外にいる時は自分で考えて、食べたいものを食べたいときに食べ、付き合いたい人と自分で決めた時に付き合っている。でも「結果」の中は、そういう「自分」というものがなくなる世界です。スケジュールは毎日変わるのですが、半日分ずつ伝達されまます。食事も黙食で5分間だけ。半鐘が鳴つたらすぐに行動しなくてはなりません。明日のことを考えることはできなくて、目の前にあることを全力でやるしかありません。やらなければ退場するしかない。過去も未来もなく、「いま・ここ」の課業だけです。非常にシンプルな世界ですが、慣れるまでに10日はかかりました。

# つねに他人を軽蔑しない者

## 『常不軽菩薩品第二十』

この章は、<sup>じょうふきょう</sup>常不軽つまり「常に軽んじず」（常に軽んじない）という名前で呼ばれた菩薩のお話です。<sup>じょうふきょうぼさつ</sup>常不軽菩薩は、お経を読んだり、仏法を説いたりとはしませんでした。代わりに、出会う人出会う人を誰であろうと決して軽んじず、「私は深くあなたたちを敬います。何故なら、あなたたちもいずれ必ず悟りを得て、仏様になられるお方なのでから」と礼拝をしていました。

### ひたすら他人を礼拝する菩薩

皆さんは、道を歩いていて突然、見知らぬお坊さんに「あなたは仏様になるお方だから、敬わせてください」と声をかけられたらどう思うでしょうか。喜ぶよりも先に、びっくりしてしまうかもしれません。中にはからかわれていると思い怒りだす人もいたと、法華経には書かれています。

常不軽菩薩は、そんな人々に石を投げられたり、棒で叩かれたりしてもけっしてめげずに、一度距離を置いて、幾度も礼拝をし続けたそうです。「常に誰のことも軽んじなかったために、誰からも常に軽んじられていた」というのが、常不軽菩薩の名前に込められた意味です。

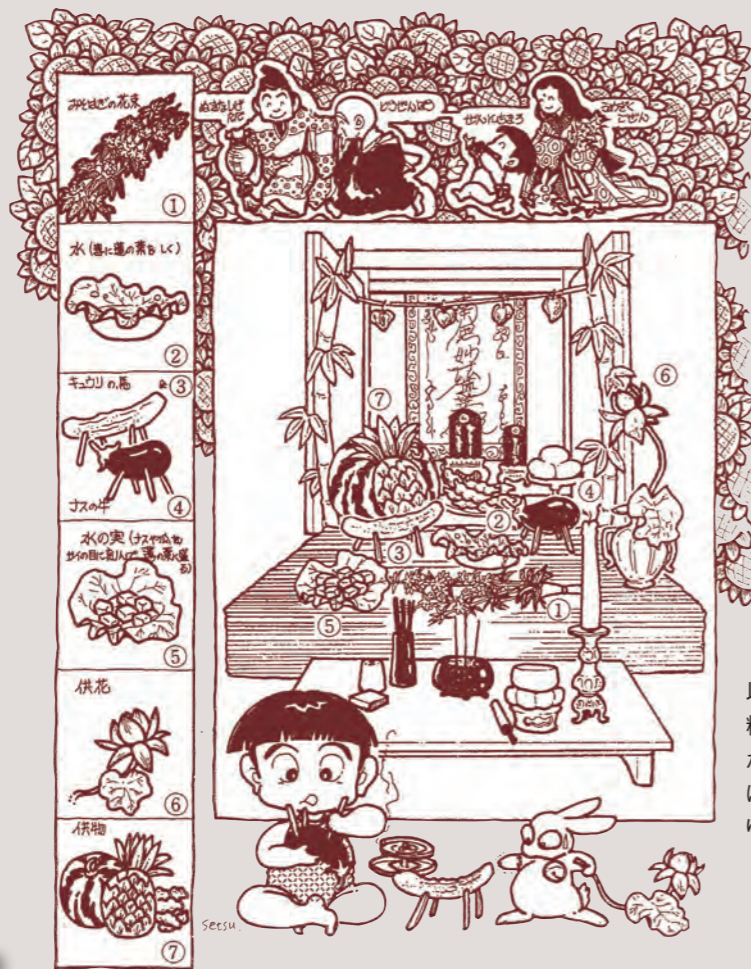
### 宮沢賢治の「デクノボー」

しかし、常不軽菩薩は死後にこうした行いが実を結び、成仏することが出来ました。そして、常不軽菩薩によって教え諭されたものたちも、その姿を目の当たりにして、仏道の修行に励むことになりました。ただ愚直に一心に、人々を礼拝し続けたことによって、仏に成れる。他人から馬鹿にされるような存在であっても、仏に成れる。仏教を学び実践する私達は、この常不軽菩薩の在り方をと

ても大切にしています。宮沢賢治の詩『雨ニモマケズ』は、常不軽菩薩の姿を顕していると考えられています。「デクノボー」である自身を受け入れ、「デクノボー」だからこそ誰のことも受け入れる懐の深さが、私達には必要なのです。

### 常不軽菩薩はお釈迦様の前世

また、実は常不軽菩薩は、お釈迦様の前世の姿で、お釈迦様の教えを今この世で聞いている私たちは、常不軽菩薩を軽んじて笑っていた人々の生まれ変わりであると、本章の最後に明かされます。お釈迦様でさえも、過去世に人々から軽んじられていたことは、人々を勇気づけたことでしょう。またお釈迦様を軽んじていた人々をも見捨てずに、教えを説いてくださる姿が、我々が目指す仏様の姿なのです。



以前は仏壇の脇に大きな精霊棚を作るお宅が多かったのですが、昨今はお仏壇にスーパー等で買ってお飾りする例が増えました。



## Q 「棚経」とは何ですか？

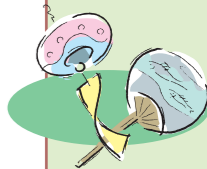
### お盆の精霊棚

お盆に檀徒の皆様のご自宅を訪問し、読経することを「棚経」と言います。棚経の「棚」は、精霊棚（お盆の時に特別につくる飾り棚）のことで、お盆に帰ってくるご先祖様を迎えるための祭壇です。

宗派というよりは、地方によって様々な形式がありますが、<sup>まこも</sup>真菰のゴザを敷いた上に、様々な野菜やほおずき、素麺などを飾りつけます。胡瓜の馬や茄子の牛も、こうした習わしの一つです。亡くなった方には、馬に乗って急いで帰って来てもらい、お経をあげ、もてなしの準備がされた場所で過ごして頂き、帰りは牛に乗ってゆっくり戻って欲しいとの願いが込められています。待ちわびた来客をお迎えする気持ちは、生きている人も亡くなった方も同じというわけです。

### 少しだけご家族の様子も気にしています

なお一説には、「棚経」は江戸時代に仏壇の検分の意図があったようです。こっそりと改宗してキリシタンになっていないかどうか確認せよ、という幕府の政策だったとか。現在はもちろんそのような意味はありません。ただご家族の状況などは少しだけ、気にしています。いつも出てきてくれる婆ちゃんの顔を見ないな、と思って尋ねてみると「半年前から施設に入った」というようなお話も聞きます。玄関に可愛い赤ちゃんの写真が飾られているのに気づけば、「お孫さんが生まれた」との嬉しいニュースも聞けます。根掘り葉掘り詮索したいわけではありませんが、そうしたお話が、「お寺は家庭の事情を把握してくれているから」と、後々の相談しやすさに繋がったりするのです。コロナ禍で棚経のあり方を迷った時期もありましたが、お寺にとっては大切な行事だと考えています。



### 夏のお盆行事が 大きく変わります

4月から専従の役僧さんが不在となり、お手伝いの皆さんは全員が住職です。そのためお盆はそれぞれのお寺が忙しく、妙光寺のお盆の棚経がお盆期間中に伺えません。別紙お知らせの上、お盆前にお伺いするなど、お盆行事が大きく変わります。ご理解とご協力をお願いします。

### 墓地工事が完成します

土砂崩落で人命にも関わる危険があるため、山側墓地の移転工事を進めてきました。予定通り7月中旬に完成します。完工期日が明確でないので、皆様への移転完成開眼法要のご案内はせず、お寺の都合の日に単独で行います。また植栽は給水の都合上、秋に行います。ご了承ください。

同時進行の池の上安穩廟増設工

事も、一部の植栽を残して完成します。駐車場の増設など景観が一変します。最後の100区画で既に予約もありますので、お知り合い等でご希望の方にはお早めにとお伝えください。



### 年会費他のお願い

例年通り年会費とお盆の卒塔婆供養、送り盆の灯籠供養のご案内を同封

します。年会費の値上げもままならぬ社会状況ですので、浄土基金へのご協力をお願いできれば幸いです。

### サポーターズクラブ 再募集のお知らせ

春の号で、行事や日常の管理等のお手伝いをお願いする「妙光寺サポーターズクラブ」を募集させていただきました。現時点で人数が少なく、クラブという形で発足ができません。ぜひご参加いただきたく重ねてご案内申し上げます。

### キツネノカミソリ群落 開花予想

山門前、池の山側斜面に咲くキツネノカミソリが見事です。今年は8月20日前後が見頃と予想しています。この中を通って古墳に至る登山道も整備されました。10万本に1本という貴重な白い花を見つけにお越しになりますか。

### 秋の生前法号授与式

10月22日(日)

法号(戒名)は本来葬式のとくではなく、生前におつけするものです。妙光寺では記念品の袈裟と数珠等の実費3万円で、希望される檀徒におつけしてきました。授与された方は、既に500人以上になります。今年も10月22日(日)お会式に併せて行いますので、お問い合わせください。



キツネノカミソリ

### 新しい非常勤僧侶が 加わります

前号の妙の光でお知らせした4名の他、7月から田村浩史上人(新潟市江南区・實相寺)が勤務の僧侶に加わります。浩史上人は田村圭亮上人の弟で、例年の八月一日の墓経にも来ていただいたことがあります。5名のお上人は全員がご住職で、それぞれ多忙な法務の合間をぬって妙光寺で勤務しています。葬儀などで急な予定変更もあり、その対応のために人数を増やさざるを得ないということになりました。皆様には、入れ替わりが多いように感じてご不安をおかけします。引き続き専従の僧侶は探していきますので、ご理解とご協力をお願いいたします。



田村浩史上人

## この夏、 「妙光寺の送り盆」が 模様替えします



昨年は当日夕刻からの大雨で、院庭の回廊で灯籠を灯しました。今年は安穩廟の増設工事で景観が一変した境内の沢浴に、新しい形式で灯す計画です。

例年8月最後の土曜日に実施してきた「送り盆〜フェスティバル安穩」は、1990年に第1回が行われました。そして昨年で33回を数えました。コロナ禍の3年間、その開催に苦慮しつつ今後のあり方を検討してきました。

34回を迎える今年、「送り盆」はその趣旨の一部を5月に実施した「開山会」に移動しました。そして「送り盆」はコロナ禍前より静かに、祈りの行事として模様替えすることにいたしました。法要と「靈山の送り火」、そして今年には延期を繰り返してきた、アコーディオン奏者cobaさんによる「小川なぎさと全ての精霊追悼演奏会」として8月26日(日)に行います。

要項は別紙でご案内しております。例年通りに献灯もお申し込みいただけます。

■秋まで区バスが走ります。ご利用ください。

巻駅前〜角田浜 バス運行

巻駅前発	9:47	11:18	14:09	15:40
↓	↓	↓	↓	↓
角田浜着	10:12	11:43	14:34	16:05
角田浜発	10:08	11:39	14:05	15:36
↓	↓	↓	↓	↓
巻駅前着	10:33	12:04	14:30	16:01

にしかん観光ぐるーんバス  
10月29日迄の土・日・祝日 1回 300円

